

令和8年度 泉大津市立図書館協議会

■第1回会議の議事録

日 時：令和8年6月6日（土）午後4時00分～午後5時45分

場 所：泉大津市立図書館オープンセミナースペース

出 席：阿児委員、岡本委員、澤谷委員、嶋田委員、高島委員、
高橋委員、谷合委員

公開の有無：公開

議 事

(1) 2025年度年次報告書について

(2) 「キミと、よみドキっ！Ⅱ」について

[事務局] 出席者をご紹介します。阿児雄之委員、岡本真委員、澤谷晃子委員、嶋田学委員、高島直子委員、高橋敏也委員、谷合佳代子委員。よろしくお願ひします。事務局を務めます図書館長の河瀬です。議事進行につきましては、嶋田議長にお願いをいたしますが、議長も議論に積極的にご参加くださいますようお願いいたします。また、記録のため、録音撮影を撮影させていただきます。それでは議長、お願いいたします。

[嶋田委員] それでは早速、議題の一つ目です。泉大津市立図書館 2025 年度年次報告書についてご説明をお願いいたします。

[事務局] 2025 年度の年次報告書をホームページにアップさせていただいております。サービスごとにご説明をさせていただきます。

まず、ビジネス支援サービスです。毎月 1 名限定で行っております企業相談会は、昨年まではビジネスレファレンスを受けて、そこから相談につながるというケースが多かったのですが、2025 年度は起業に向けた相談をしたいという、積極的な申し込みに変化をまいりました。つい最近もカウンターで起業相談していいんですね、というようなお尋ねがありました。また、相談を通じてビジネスライブラリアンとの信頼関係ができ、そのビジネスに関わらず、新たなレファレンスにもつながっております。商用データベースは利用が 2 倍近く増えました。体験型のイベントと組み合わせた企画の成果ではないかと思ひます。これまで利用の少なかったデータベースに関しても利用が伸びてきております。課題に活用している大学生の姿も見られるようになってまいりまして、2026 年度は、データベースの使い方というよ

りは、どのような場面でどう使えるかというところを伝えるセミナーですが、レファレンスの回答を書籍だけではなく、データベースもご案内するというような形ができるように、図書館員のスキルアップにも努めていきたいと思っています。毎月開催しておりますビジネス支援セミナーや知的財産セミナーは、4年が経ちリピーターの方にプラスして新規の方がいいバランスでご参加をいただいております。次はこういうテーマで開催してほしいという参加者の知的欲求に応えるような形にしておりますので、満足度が高く、継続的な学びにつながっているのではないかと考えております。

次に学校支援サービスです。学校への配送冊数に前年度と変わりありませんが、学期ごとに入れ替えを希望される学校があったので、朝読サポートの件数が前年度19件から2025年度は46件と大幅に増加しております。授業サポートは学校によって差はありますが、このサービスを始めて初めて全校11校で活用されました。また、運営相談や日々の小さな疑問など学校司書一人では決めかねることを気軽に図書館へご相談いただけるようになってきております。今回の「キミと、よみドキっ！Ⅱ」の意見聴取にも、学校司書が積極的に協力していただいております。より現場の声を反映できるものと考えております。

次に医療健康情報サービス。開館から年3回のペースで開催しておりました認知症介護相談会が、相談者が少ないことから8月いっぱい終了となりました。その直後に、次の相談会はいつですかというようなお尋ねがあったりして、一定のニーズはあったのだということを再認識しております。仕事帰りとか図書館利用のついでに、認知症介護に関しての相談をするという場がなくなったというのはちょっと残念ですが、医療情報展示や他の企画などでしっかりと情報提供をしていくことと、地域包括支援センターと密なやり取りができておりますので、そちらとの取り組みを継続して、いつでもつなげるという状態にしておきたいと考えております。市民の健康維持のために、働く世代からのフレイルセミナーや熱中症予防セミナーを繰り返し行っています。こちらは専門家と連携した取り組みということで継続してまいりたいと思っています。

シビックプライドの向上ですが、地域経済課企画のオリアム随筆賞と一緒に盛り上げるために、エッセイストによる講演とワークショップを図書館で開催いたしました。応募につながったかというのは不明ですが、オリアム随筆賞審査会で、市民の応募作品のレベルが上がっているという声をいただい

ております。また、開館以来毎月開催しております地域の歴史文化再発見講座で、地域資料の重要性とか保存方法というところを繰り返し伝えておりますが、先日、遺品整理をしていたら出てきましたと、地域資料が持ち込まれました。こういった資料は意識しないとなかなか残っていかないということを市民の方にご理解いただけるようになってきたのかなと思っています。

2025年度の視察は95団体ございました。図書館協議会で作成いただいたストーリーによる質的評価に関して話を聞きたいというケースが増えております。開館当初は開館の経緯や建築というところの内容が多くを占めておりましたが、最近では、図書館を拠点としたまちづくり、ビジネス支援サービスの取り組み、行政や産業振興との連携などの取り組みに対しての視察が増えております。

バイオフィリックデザインを取り入れたリフレッシュコーナーは、長崎大学に継続的に調査していただいておりますが、2024年の空気環境学会に続いて、2025年は日本建築学会でも発表をいただきました。2026年度からは、兵庫県立大学も加わって、より深い調査と一緒に継続的に行っていく予定になっております。

議会図書室支援、行政支援サービスは、展示とか活動のPRという図書館から一方向の矢印でずっと続けていた印象だったのですが、2025年度はレファレンスをいただくとか、図書館のサービスについてもっと知りたいと言っただけのようなケースが出てきております。『これからの図書館像』にもありますように、地域自治体が独自に情報収集を行い、現状判断や政策立案を行うことが必要。市民自らが必要な情報を収集し、意思決定することも必要。このために必要になる多様な資料、情報を提供する役割を担うのが図書館というところをしっかりと実行していくために、それぞれのアクションを続けてまいりたいと思っております。報告以上です。

[嶋田委員]ありがとうございました。皆さんからご質問やご意見はありますでしょうか。私から一つお尋ねします。視察が今年もたくさんあったということで、日刊工業新聞からの視察はどのような目的だったかというのを教えていただけますか。

[事務局]シープラと市内にある株式会社HCIと株式会社USEYAを3か所回る視察申し込みサイトを作る動きがあり、その取材でいらっしゃったのです

が、この図書館がどういった図書館かを知りたいということで、1時間ぐらいご案内をさせていただきました。

[嶋田委員]ありがとうございます。何か具体的に泉大津市立図書館が記事になったことはありましたか。

[事務局] 8月4日の日刊工業新聞朝刊27面に写真入りでご紹介をいただいています。

[嶋田委員]ありがとうございます。そのことは教育委員会の皆さんや市役所の企画の方、あるいは議会など、ご存知なのでしょうか。

[事務局]はい。

[嶋田委員]ご存じなのですね。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

[阿児委員] ご報告ありがとうございます。学校支援で、朝読用の要望が多く、さらに学期ごとに入れ替えとなると、業務が集中すると思います。ご要望とか取りまとめとか、バランスがあると思うのですが、去年の成果を経て、今年の動きが変わったのかを教えてくださいたいと思います。

[事務局] 全学校が同じスケジュールで授業を進めておりますので、授業サポートも時期が全て重なり、必要とされる資料の要望が一気に来ます。去年の反省を踏まえて、今年は1つの学校に作ったセットをそのまま次の学校にお渡しするとか、おそらくこのくらいの学校から、この単元は要望が来るだろうと予測を立て、冊数を調整したり利用時期をずらしていただくなど、学校司書と調整をしております。

[阿児委員] あらかじめ参考となるリストのようなものをシープラで用意して、それをベースとして、プラスしてほしいとか、マイナスしてほしいという要望を聞いていくと、ゼロから作り始めなくていいのではないかと思います。もう一つお聞きしたいのが、全学校11校が利用されるようになってきたというところで、シープラと学校図書館の1対1のつながりはできてきたと思います。1対1対応ですと、また同じことを複数校に言わねばならない、いいノウハウが学校間で共有されていない、シープラを通じないとしても共有できないところがあると思います。そこをつなぐためのネットワークができたのか、またネットワークができたのなら、全11校でのつながりができたことによって何か変わったのか、お伺いできればと思います。

[事務局] シープラが開館した時に、システムを統一しましたので、こちらから学校の状況がそれぞれ見えるということと、学校支援のグループを作っていますので、年に1回の学校司書の研修には、私どもの方から、研修の講師として伺っております。今年度はまだ参加できておりませんが、学校司書連絡会には図書館職員が参加する体制はできております。

[阿児委員] 学校間でのやりとりが活発になったということはあったのでしょうか。

[事務局] 課題がよく見えるようになりました。きちんと整備が整っているの、すごく利用しやすくなっているけど、一旦整えたものの、先生が変わってしまっ、やり方がどんどん変わっていった学校があるとか、レイアウトに困ってらっしゃる学校があるというようなことを直接お聞きできます。

[阿児委員] そういう場がだいぶ安定してきたということは、すごくいいことかなと考えました。ありがとうございます。以上です。

[嶋田委員] ありがとうございます。今の関連で高橋委員、いかがでしょうか。

[高橋委員] いつもありがたく利用させてもらっています。小津中学校の例で言いますと、学校司書がすごく主体的に動いてくれています。特に探究学習の共創プロジェクトという時間を設けているのですが、毎年50から80ぐらいのプロジェクトが同時進行しています。学校司書が先回りして、各プロジェクトに関連した本を市立図書館から揃えていただいて、学校の図書館にずらっと並べてくれています。すごくありがたく使わせてもらっています。

[嶋田委員] ありがとうございます。高島委員、いかがでしょうか。

[高島委員] ありがとうございます。開館当初から協議会に参加させていただいて、毎年年次報告をお聞きしています。シープラのコンセプトである、[本を借りるだけじゃなく、市民の学びの場、交流の場]として発展してきている様を間近で見させていただいているのですが、今回は特に、それがいろいろ定着したなという思いでお話を聞かせていただきました。特にシビックプライドの向上で、オリアム随筆賞の参加者のレベルが上がったところであるとか、市民の意識が少しずつ、図書館の活動を通じて深まっているというところは、シープラが泉大津の知の拠点とか文化的な関心の場として、発展していけばいいなとすごく思っているの、本当に嬉しいです。このシープラの

魅力がまだ届いてない市民の方にも広く知ってもらうには、さらにどういったことが必要なのかということを考えていけないと思いました。一点質問ですが、2ヶ月ごとで変わる企業展示は、どういった選考方法で選ばれているのか、公募なのか自主的に応募しているのか、そのあたりを知りたいなと思いました。

[事務局] ありがとうございます。泉大津に本社がある企業にオファーをしています。世界的に有名なのに市民は知らない企業やその技術、大きな工場はあるけどあの中は何を作っているのだろうなど、市民の方が疑問に思われるようなところに積極的に声をかけております。この冬には、隣にあるホテルを経営していらっしゃる会社を取り上げました。市民こそホテルに泊まる機会はないと思いますので、中の様子とか会社のことをお知りになるとよいだろう、そういう視点で依頼をしております。

[高島委員] 知り合いの方で古民家の再生とか、伝統的な建築物の保存をなさっている建築会社がありますが、広報面で苦労していると聞きますので、市民からの推薦などを取り入れてもいいのかなと少し思いました。ありがとうございます。

[嶋田委員] ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

[谷合委員] 私も高島委員と全く同じく“5年目でついに！”という感想を持ちました。特に私は、図書館協議会の委員になってから最初3年くらいずっとビジネス支援サービスが伸びないね、残念だねと言い続けてきたので、すごいなと思いました。やっと市民の皆さんがビジネス支援サービスの存在を知ったのかと思いましたので、逆に言うとやっぱりサービスの定着には5年かかるのだととても思いました。毎年毎年、数値を上げていこうというのはあまり良くないと一年前にも言いましたが、少なくとも5年ぐらいのスパンで見ていかないと成果は見えてこないし、もっと言えば、小学生や中学生が大人になった時どうなっているかというのは、10年先を見据えないとわからないと思います。それを大人たちがちゃんと見守れるのか、待てるのかということも大事だと思いました。企業展示も、名前だけ見たら何の会社か全然わからないので、すごくいいアイデアだと思いました。話が前後しますが、ビジネス支援のところでデータベースを使う学生さんがいるという報告が、すごく私は心に響きました。この近辺の大学9校くらいで非常勤講師などをしていますが、200近い有料データベースを買っている大学と、数個しかない

という大学があって、あまりにも格差があると学生はどうしているのだろうと思っていました。その点、シープラがいくつか提供してくれたら、少しでも格差の是正につながるのだろうなど。まさに公共図書館としての役割というのは、そういうところにもあるなと思いました。以上です。

[嶋田委員]ありがとうございます。澤谷さんいかがでしょう。

[澤谷委員] 私も高島委員谷合委員と同じ感想で、図書館はそんなに急激に変わるところではなく、やはり時間をかけて積み上げていくことで、コツコツやってきたことが花開いてきているという感じがしました。庁内支援がきたというのがすごくいいなと思っていて、私も図書館員なので、市役所の職員からこんな本ありますかとお尋ねがあるのですが、一度こんなことで役に立ったよということが伝わると一気に広がります。議会の時期などは当館もすごい量のお尋ねが来て、とてもじゃないですが手に負えないと職員は言うのですが、今、丁寧に支援することで図書館が役に立つというのを実感してくれる職員が増えるよと言っています。数字だけじゃないような評価もいろんな人に聞き取って、オリアム随筆賞の応募レベルが上がっているということも、ストーリーとしてその変化になっているのかなとも思いました。実は最近、当館の副館長がシープラに視察に来させていただいて、社会教育主事なのですが、ストーリーによる評価にすごく興味を持っていました。シープラが先んじてやってくださったので、当館でもぜひやってみたいと話をしていたところでした。

[嶋田委員]ありがとうございました。では岡本委員お願いします。

[岡本委員] まず私が印象的だったのは、ビジネス展示のテーマがかなり攻めていいなと思います。かなりテクノロジーよりデジタルよりのものがずいぶん取り上げられている。テック系とかですね。私は結構これは重要かなと思っています。比較的こういう展示は、やや安牌なところを狙う傾向は強いと思うのですが、緩急の付け方だと思いますが、テーマとしてこういうことがこれから大事ですよということを伝えていくという意味で、非常に好ましいのではないかなと思いました。あと、地元の企業の紹介のところで、ホテル会社の話は非常に重要だと思います。私は横浜に住んでいるので、よくどこのホテルがいいかと聞かれます。仕事柄もあって答えられるようにしておくんですけど、地元の間が地元のホテルについてきちんとレコメンドできるって、かなり重要だと思います。それは横浜とか大きな都市だと

非常に容易ですが、小さな町だからこそ、地元の宿がどこにあり、どこがおすすめかっていうのをしっかり言えないと、これシティプロモーションとか、市内の宿泊滞在客数にも確実に影響するので、実は地味に非常に良い取り組みじゃないかと思いました。他の方が触れてないところで、2つあります。認知症相談会が、ちょっとやめてみたら声がかかってというのは難しさがあるなと思い、同時に定期的に見直しをしていくという判断も必要だと思います。その結果、入れ違ってしまうことがあるのも致し方ない。ただその一方で、時間をかけなければ始まらないと思うのはシビックライドの向上のところ(地域の歴史文化・再発見講座)で、これは今までも触れていますけれど、本当にその道の第一線の先生方にこれだけの顔ぶれで来ていただくというのは、相当すごいことだと思います。ほかの自治体と比較するというのはあまりセンスのないことだとは思いますが、これは市民の方にきちんとご理解いただいた方が良くと思います。この場所、この町にいて、これだけの講座を受けられるということに非常に意味があるわけで、難波まで出れば、確かにこれぐらいの先生の授業を毎月受けることができるとは思いますが、それを泉大津でできるということに非常に意味があるし、これだけの顔ぶれの方々にここにきていただいて、この街を知っていただくことになっている。実はそれはシティプロモーション的に大いに意味があることで、決して有名ではない泉大津市だからこそ、ここにこれだけの人たちにきていただいてお話しいただく、この街の印象を持って帰っていただくということにもなっているのではないかなと思いました。こういう観点でも、私は行政内にきちんと図書館の取り組みを認識して評価していった方が良くないかと思いました。

[嶋田委員]ありがとうございます。私の方からもう一つお聞きします。2025年度、大きな成果が見えてくる中で、例えば議会の委員会、ないしは本会議等で、図書館に関するご質問などがあつたかどうか教えていただけますでしょうか。

[事務局]図書館に関してはありませんでした。

[嶋田委員]ありがとうございました。根本的なことを聞いてしまって申し訳ないですが、そういった委員会での議論とか、館長は委員会には出られないですか。

[事務局]出ることはありません。

[嶋田委員]わかりました。ありがとうございます。他の観点で何かご質問、あるいはご意見はございますか。続けて申し訳ないのですが、私からも一つお聞きします。年次報告書の16ページ目に25年度の報告および評価ということで、評価については前回の委員会で、ちょっと辛口だったのではないだろうか、もう少し評価点の軸の持ち方等も見直したほうがいいのではないかとということがありました。報告および評価のところの表の下から3行目に購入資料回転率ということで、その年度内に買った資料が14,214点。新着が43,711冊借りられたということで、3.1ってなかなか数字だと思ったんですけど、この購入資料回転率の目標値を4にした根拠を教えてくださいませんか。

[事務局]実は初年度から変更しておらず、根拠もない数字です。貸出冊数などを架空で入れたときに、蔵書回転率を3にしました。

[嶋田委員]ありがとうございます。類似団体を参考にされたのかなと思ったので、もし参考にされた図書館があったら教えてもらいたいなと思った次第です。実は他にこういうを出しているところをすぐ思いつきません。例えば、前職でやっておられたので引き継いだとか、これを採用された関係を教えてくださいいいでしょうか。

[事務局]以前の館では、ここまでのパーセンテージは出したことはありませんでした。資料を継続的に買わせていただくためには、実際に新しく買ったものが使われているとか、選書がきちんとお客様に届いているかというのを測るものが必要かと思って回転率を出しています。

[嶋田委員]ありがとうございます。他の方はいかがでしょうか。

[谷合委員]登録率についてですが、貸出カードの有効期限は何年ですか。5年ということは今年期限の切れる人が出てくるってことですね。では来年登録率がどうなるかですね。目標値を見ると、ずーっと上がるようになっていますが、もしかすると一旦下がる恐れがあるってことですね。そのあたりを今後どうされるかというのがちょっと気になるところです。

[事務局]ちょうど7~8月から9月1日の開館に向けて先行でカードを作られた方がいらっしゃいますので、そのぐらいから5年目の更新がどんどん増えてまいります。どのぐらいの割合で更新いただけるのか、新規で登録する方の数も横ばいではありますので、しっかりフォローしていければと思っています。

[嶋田委員]ありがとうございます。それに関連して、すべての登録者の方のメールアドレスがわかるわけではないかもしれませんが、メールアドレスをお聞きした時の理由は、督促や予約のお知らせ限定になっているかもしれませんが、例えば、まもなく更新時期ですというご案内メールを送ることで、更新を促進や動機づけができるのではないのでしょうか。技術的にやれるかどうかということと、コンプライアンス上問題ないかということと、そのような議論があったのか教えてもらっていいのでしょうか。

[事務局]メールでお知らせというのは、予定しておりません。館内 OPAC でもおそらく出ないので、カウンターに来ていただいて更新することになります。今後、ルールを固めていきます。

[嶋田委員]ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

[高島委員]更新と新規登録は手続きが異なりますか。例えば、期限が切れる前に更新した方がいいのか、切れてもう一回新規として登録の手間ってというのはどれくらい違いますか。

[事務局]1ヶ月前から更新できる予定にしています。更新するためにハードルがあると、もう使わないとなる方もあるかなっていうところと、窓口がかなり大変になるかなという心配がありますので、現住所などの確認は簡単にして、気軽に更新ができるようにしようと思っております。ただ、在勤や在学の確認はこのときにしかできませんので、しっかり確認して更新をします。

[高島委員]恐らくですが5年で更新ということを知っている方はあまりいらっしやらないのではないのでしょうか。広報に載せると、それなら更新を前もってしとこうかという人もいるかもしれないなと思いました。

[事務局]カード作成時に説明を行っていますが、覚えていらっしやらないですよ。

[澤谷委員]期限のことを広報するのではなく、5周年を広報して、そこにカード5年更新ですと書けばよいかと思いました。

[嶋田委員]岡本さんお願いします。

[岡本委員]これは記録に残すためにも発言しておきたいのですが、更新をしない図書館も世の中にはありますが、更新はちゃんとした方がいいと思いま

す。更新をしないと、実態としての利用者数が読めなくなり、住民数をはるかに超えるカードを発行している図書館もあります。そういう意味では更新をしているのはすごく良い。ただし、更新をしっかりとすることは結構コストがかかります。ただ、住民サービスの対象がどれぐらいのボリュームなのかということは、本来厳密に測定すべきことなので、やって当然だと思います。今回5年目にあたって、登録数が減ったとしても、そこは慎重に評価すべきではないかなと思います。最初の5年は正直言えばご祝儀効果がかいので、もちろんこれを持続することはすごく重要ですけど、そう簡単にその数値を伸ばせるかっていうと難しいですね。例えばマイナンバーカードがちょうど切り替えに入っていますけれど、果たしてどれぐらい維持できるのか。マイナンバーに関しては、凄まじいだけの物量をつぎ込んで、めちゃくちゃPRしていますよね。それでようやくあれぐらいとか、そういうことも含めて、横の比較をとって、しっかり評価した方が良いと思っています。もう一点は、これは結構マーケティング的な話だと思います。しっかりと5年間なら5年間できちんとお伝えして、さらに更新していただくというのは、ぜひ住民の方に認識をしていただくようになれるといいなと思うのですが、いかんせん5年はかなり長いので、マイナンバーとか認識している人ほとんどいないですよ。だからここは先ほど澤谷委員が言われたように、グッドニュースと絡めてお祝い事を作っていく。同時にそれは、5年に1回は大きなイベントをやる、そこに予算が必要であるという認識のため、それを作るためにイベント予算が必要っていう組み立て方が良いのかなと思います。ただ、5年ごとにお祭りにやるのではなく、実はその裏の目標として認識していただいて、カード更新をしていただく。それによってサービス対象の奉仕対象の住民がどれぐらいの数なのかっていう実態を把握することが、実は次年度予算の策定にきちんと密接につながっていくというような、立論ができるといいかなと思いました。

[嶋田委員]ありがとうございました。いかがでしょうか。

[阿児委員]関連してなんですけれど。目標値には入ってこないと思うんですけども、登録率が目標値に入りますが、更新率みたいなのは、やはりデータとして残しておくのがやはり重要なのかなと思っておりまして、ちなみにそういう更新率が公表される図書館とかあったりするんでしょうか。

[澤谷委員]更新率ではなくて、年次利用者というような取り方をして、一年間にどれぐらいの人がその図書館を使っているかというのは、きっちりと公

表しています。そうすると、だいたいどのぐらいの登録と、使っている人との割合がわかり、どれぐらいの人が更新するかという予測もつきます。他の図書館では電子図書館をやっていらして、使わないけども登録されている方もいるので、その人たちが数字に出てこないことにはなっているのではないかなと思います。

[阿児委員]そのあたりが、せっかく最初だからこそ使える武器なので、取り始めることがすごく大切なタイミングだと感じました。やはり、このタイミングだからできることってというのは大きいのかなと思います。他の図書館であれば、今からそれ取るのはなかなか大変だとかってというのはあるのですが、まだ更新ってというのが、これからもうすぐだと思うんですけども、戦略を練って取ることができれば、そこまで大きなタスクにもならないですし、大きな作業量にもならず、実はデータとしてきちんと取ることができるのであれば、それはこれまで見えてこなかった有用なデータになってくるのかなというのは、今、皆さんのコメントとかを聞いて感じたところです。以上です。

[嶋田委員]ありがとうございます。年次報告に関して、関連で何かございますか。私から聞いていいでしょうか。もうご説明いただくまでもなく、その背景が前提になっていると思うのですが、ビジネス支援サービスしかり、健康情報、医療の関連、いわゆる課題解決支援サービスと言われるような領域で、こういうところともうちょっと連携を密接にやりたいんだけども、思うように進んでいないというのがもしあれば教えていただけますでしょうか。

[事務局]医療健康情報の部分では、高齢介護課や地域包括支援センターと本当に密にやり取りをさせていただいていますので、日常的な話もできていて、すごくありがたいなと思っています。ビジネス支援に一番関わりのある地域経済課とはショップの絡みがありますし、いつもイベントとかやり取りはあるんですけども、ビジネス支援で一緒に何かって動きがまだなかなかできていないので、今年度はそこに重点を置きたいと思っています。去年は市がシティプロモーションをしっかりとやっていくんだっていうのを掲げていましたので、図書館も観光という視点で、市の広報部門としっかりとつながっていきましょうというのはやっているところです。

[嶋田委員] はい、ありがとうございます。市民の皆さんの中に、活動のグループとか、友の会とか利用者懇談会的のような枠組みがあったりとか、コミュニティがあったりしますでしょうか。

[事務局] サポーターという形で、4つグループがあります。月に1回のブックスタートを支援していただいているサポーター、2ヶ月に1回本の修理をやっていただくサポーター、布の絵本を作るサポーター、対面朗読のサポーター。個人で申し込みをいただいて、決まった日に活動をしていただいているというところですが、対面朗読は、去年は3名、4名ぐらいだったのか、今年は10名近くに増えました。登録したら終わりではなく、図書館と一緒にやっていただきたいので、必ず、経験者でも講座を受けていただいて、毎年登録をしていただくという形にしています。それでもまた年に1回講座を受けて次の年も活動したいという方がすごく増えているというのが去年から今年にかけての登録時期の印象です。

[嶋田委員] ありがとうございます。この年次報告書のイベントの報告のページのところに、対面朗読サポーター、ブックスタートサポーター、修理サポーター、布の絵本サポーターの養成講座もやってらっしゃるということですね。こういう団体の存在がイメージ的に報告にあるといいかなと思います。もう一つは、市民の方が日常的な利用をしてくださっていること自体が図書館に対する支持、図書館行政に対する評価とも言えると思うのですが、もう少し具体的な声になるような、理想としては、市民の方、利用者の方から主体的に声が上がってきて、そんなものがやれるといいねと、いうことになるのが理想と思いますけど、いずれにしても積極的に図書館を応援したいという、市民コミュニティを作るということはとてもいいことだと思います。なかなか市民の皆さんはサイレントマジョリティで、いいなと思っていたり、実際使っていたりしても、その政策について、声をわざわざ上げてくれないというんでしょうか。図書館の泉大津市における図書館行政について、積極的にせよ、あるいはこんなことはないと思いますが消極的な局面が出た時に、具体的に意見を出してくれるようなコミュニティがあるということは、市民にとっても、泉大津市の行政全体にとっても、すごく意味のあることだと思います。何かそういう動きがあればいいなという感想とかコメントということで、要望とかする立場ではございませんけれども、以上でございます。ありがとうございます。

[阿児委員] サポーターの方々の活動に対してですが、博物館はボランティアワークがかなりあって、展示の支援であったりとか、学芸員ではない方々であるボランティアから、ボランティアの視点で博物館をご案内するという成果をまとめて、我々の資料館でも読めるような形で準備してるんです。ボランティアのガイドで使ったワークシートを全部プリントアウトして、何年度のボランティアが作られたガイド一覧を資料室の方で見れるんです。例えば修理サポーターが携わった本を展示という形で修理の前後が見れると、サポーター活動のおかげで綺麗になって、新しくまた手に取って読めるようになっているとわかりますし、サポーター自身が活動していく中でも、成果として出てくると、多分好ましいかなと思います。これからサポーターをしてみたいけれどもハードルが高いとっていらっしゃる方に対して、活動が見えることになると思いますので、もし計画の中で取り込めそうであれば、ぜひ取り込んでいただきたいなと思います。以上です。

[嶋田委員] ありがとうございます。事務局からコメントございますか。

[事務局] サポーター活動の展示はすごくいいなと思いました。活動自体はオープンセミナースペースで行っていただいているので、皆さんもフリーに見てくださって、それこそ布の絵本の活動とか「何やってるの」って入ってこられて、来年来ますって言っていただけることもあるので、そういった呼び水とか大事だなと思います。

[嶋田委員] 今の阿児委員からのお話も含めて、ホームページに掲載したり、やっているところを見てもらうのが一番のPRだと思うんですが、それも図書館の方が拾い上げるのは大変だと思いますので、紙面とか、メディアは用意するので、皆さんの活動を皆さん自身で広報してみませんかとか、アピールしてみませんかということでもよいのかなと思いました。

[嶋田委員] では、次の議案に移らせていただきます。議事の2つ目、「キミと、よみドキっ！Ⅱ」について、事務局よりご説明をお願いいたします。

[事務局] 前回の協議会で、この「キミと、よみドキっ！Ⅱ」について、皆さんから家族で参加できるワークショップとか、オンラインで顔を出さずに参加できるワークショップなど、いろいろな案をいただきましたが、年度当初ということもあって呼びかけが難しかったので、今回は、泉大津市の全児童生徒にオンラインアンケートを取るという方法を取らせていただきました。まだタブレットの配布ができていない学校や修学旅行準備で回答する時間が

取れない学年などありましたが、校長先生はじめ学校のご協力に感謝いたします。アンケートに自由記述欄を設けたところ、学校の図書室や図書館シープラに行きたくなるには何があったらいいと思いますかという問いに対して2,726件。読みたくなるには何があったらいいと思いますかという問いに対して2,662件の書き込みがありました。もうそれだけすごうありがたいなと思ったところです。5月31日までの期間でしたので、今週バタバタとまとめを作っていたのですが、意外と本は嫌い、読むのも嫌いと答えていても、シープラには来たことがあるという子供がすごく多いというのが一番の印象です。自由記述のところになんと書いてくれるかというのが一番欲しかったところでしたので、その中から少しご紹介いたします。行きたくなるには何があったらいいと思いますかという問いには、飲食スペース、ドリンクバーとか自動販売機とかフードコートというような言葉が出てきていました。これはシープラだけではなく、学校図書館にもということです。あとは寝転びながら本を読めるところ、くつろぐスペース、学校に関しては階段のようなものを置いてそこに座って読めるという具体的な想定があるんだなというようなものもありましたし、個室、自習室、その対局にありますけれども、交流する場所、あとはイベントと書いた子供がすごく多かったです。イベント、楽しいイベント、みんなでやるイベントというような文言が並んでおりました。こういったものは図書館とか図書室に準備したりして、大人が整えていけると思ったところですが、読みたくなるには何があったらいいと思いますかという問いで、本の魅力とか良さを伝える、本が楽しくなる気持ち、本の要約やあらすじで興味が湧くようにする、おすすめの本を紹介する、誰かが勧めるとか、伝えてもらうと、すごく読みたくなるんじゃないかというような意見がとても多かったです。図書館図書室で取り組みを進めていけばいいのかなというのが、まだざっくりしていますけれども、感じたところでございます。

[嶋田委員] はい、どうもご説明ありがとうございました。では、この点について、いかがでしょうか。高橋先生、もし校内で話題になっていたりとか、生徒さんから何かありましたでしょうか。

[高橋委員] 先ほども言いましたが、子供の図書室利用がすごく増えていきます。昨年度、授業とは別に、子供たちが自ら必要なプロジェクトを立ち上げる中で、図書室のお手伝いをするプロジェクトというのが任意で立ち上がっ

て、調べる学習を学校司書と一緒に研究していくという感じで、いろいろ活動は広がっています。

[嶋田委員] ありがとうございます。では、他に皆さんいかがでしょうか。

[谷合委員] 高橋委員が、図書室にくる子供が増えたとおっしゃっているのは小津中だけの様子ですか。

[高橋委員] ごめんなさい他校の様子はわかりません。

[嶋田委員] そのあたり館長は何か把握されていますか。他の学校のご利用状況とか。

[事務局] 今回の調査の中で、授業以外で学校の図書室に行きますかというのがあります。学校別の表をスクリーンに出しておりますが、どこの学校がというよりは、よく言われていることではありますけれども高学年になると急激に数が減るといって、明らかに4年生ぐらいを機に行かないの方に変わっていきます。次のシープラには行きますかという問いでは、上の学年の方がすごくシープラを使っていることがわかりました。

[嶋田委員] 面白いですね。ありがとうございました。

[澤谷委員] 子供たちが、すでに本を読む以外の場所として図書館を認識しているのだと感じました。一人になりたい、友達と一緒にしゃべりたい、おやつを食べながら過ごしたいというのは、すごいな、大人よりよくわかっているなと思いました。高学年になると図書室に行かないというのは、別に普通のことです。図書室に行くから読書をするわけでは決してないと思うし、本と触れ合う場は他にもあるし、シープラに来られていたり、お友達と貸し借りしたりってということもあるだろうし、それは普通の現象で、でもそれだけ図書室とかシープラに期待したいこともたくさんあげているというところが、大人も見習わないといけないのではないかと思いました。

[嶋田委員] ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

[阿児委員] すごく単純なところですが、先ほど年度当初でタブレットを配ってないから回答できない学校があるとおっしゃっていましたが、フォームを作って、ギガスクール端末で、1年生から6年生、中学生にも入力してもらったってことでよろしいでしょうか。それが当たり前になっているのを認識しないといけないと改めて思いました。その回答率がこれ

ぐらい高い。そして今回の回答数の約 2,800 ですと、泉大津市の 4%ぐらいですよね。4%の声ってすごく大きな声だと思いますし、それが当たり前じゃんウェブアンケートで、皆さん積極的に答えていただいているっていうのが、やはりこれまで 5 年間で培ってきた学校図書館の方々のやりとりっていうのが一つ見えているところなのかなと思います。アンケートの中身もそうなんですけども、答えていただけたっていうところはすごく評価していいところなのかなっていうのはまず思ったっていうのが一つです。そうすると、デジタルは小学生・中学生を通じては、もうベースになっていますし、“読む”としても“読む”の形が本当に多様なものであるっていうキミドキの目指したところをベースにして、このキミドキっていうのも考えていかないといけないのではないかと思ったところです。

[嶋田委員] ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

[岡本委員]今の阿児委員の話を受けて、私もそれは本当に大事だと思って、これだけ子供たちがデジタルで答えているということは、本当に強く言っていた方がいいと思います。私も仕事で手書きでのアンケートを取りましようという、センチメンタルなことを言われるのは意味がないと思っています。量を集める、特にこういう市民の声を、量として集める上でデジタルであるということはかなり重要だと思うんですね。これを世の中のトレンドの変化としてしっかり認識していただくというのはいいと思います。これ最初見たときに回答数 2,000 ってすごいなと普通に思いましたし、一方で 2,000 手書きだったらとてもじゃないけど処理ができないですよ。何が目標に対して大事かって考えたときに、子供たちの実態をなるべく大量のデータで把握して、正しい平均値を得るっていうのはものすごく重要なことだと改めて思いました。量としてかなり出てきているので、図書館のサービス像とかに関わってくるところで、重要なテーマになるかなと思ったのが、漫画とかゲームとかそういう要素を求める子供たちは相当数それなりにいるということですね。それはそれで全然構わないと思っていて、むしろもう少し日本の図書館、エンターテインメント的な要素を重視した方が良く思っています。ただ、そこはそれぞれの自治体ごとの判断があり得ると思っていて、特に泉大津のような図書館が 1 館であり、スペースも限られている施設、予算も限られている施設の場合、どういう道を取る必要があるのかというのは、このアンケートを取ったからこそ、要検討かなと思っています。ただ、それでもやっぱり相当数のニーズがある、リクエストがあるということは、重く

受け止めた方がいいし、これだけの回答の中で共通に示されているということは、馬鹿にならないと思います。ちなみに、個人的な体験ですが、最近中学生の姪がハマっている文スト(文豪ストレイドッグス)を勉強しているんです。なるほど、こういうアプローチから入って、そしてその原作も読むという流れは実に素晴らしいなあと思うんですね。最近書店に行っても、近代の文学者の本がめちゃくちゃつまれている。正直、衝撃を受けるぐらい読まれているということを知り、そしてここは誤解ないようになるんですけど、漫画は必ずしも、それで文学とかを読むための導入の道具ではなく、それ自体楽しむ作品であって良いと思うんですが、一方で、そういう入り口を広くすることによって、例えばその文学作品、オリジナルのテキストに対して触れる機会が作られるのであれば、それは大いに結構なことかなと思っています。決して文学の方が漫画より上ということではなく、多様な作品の多様な形態に触れるということはすごく重要なことであって、その時に漫画やゲームが有効な手当になっているということは十分に踏まえた上で、これだけ子供たちが声を上げてくれたからこそ、ではどうするべきかということや子供たちとの対話の中で決めていけると良いのかなと思いました。おそらく限られた図書予算の中で、半分を漫画にというわけには当然いかなければ、もし漫画作品をある程度購入していこうとするなら、どういうふうにするのが良いのかというのを、ぜひ泉大津の子供たちの声において決めていけるというのが、このアンケートの生かし方として大事なところではないかなと思った次第です。

[嶋田委員] ありがとうございます。ギガスクール構想の前倒しで、こういった、一人1台タブレット端末があるという環境を、本当に積極的に生かしながら、子供たちの自己決定権に関連するこの図書館のあり方への意見聴取ですよ。これは本当にデジタルの仕組みを使って参加型でやっていくということ自体、すごく大きな意味があったと思います。そういう意味では、この結果をどのような形で子供たちにフィードバックしていくかというところですね。図書館の狙いというか、皆さんのことは皆さんにしかわからないということがアンケートの意味でもあると思いますので、その辺の使い方なんかもすごく楽しみだなと思います。いわゆるデジタルシチズンシップ教育と言いましょか、人的な思考や発露というものが、デジタルという環境ベースを避けて通れないという少しネガティブな言い方かもしれませんが、積極的なデータの使い手になるということや、まさに実践的にやられているということがとても素晴らしいと思いました。今のところ、河瀬館長の

方でどんな形でフィードバックするかプランがあったら教えていただけますでしょうか。

[事務局] このアンケートにプラスして、各学校の司書が学校図書館の中で子供たちにヒアリングをしてくれています。アンケートは一方通行ですけれども、学校司書だともっと深いお話を聞くことができているのではないかと考えています。まだいただいていないので、どんな内容かはわかりませんが、実際の掘り下げていったお話と、このアンケートをミックスしたところで、何か打ち出すことができたり、おっしゃるように、子供たちと膝を突き合わせて一回お話ししようかという場が必要かもしれません。前回も、実際話を聞いたからこそ分かった部分がたくさんありましたので、書き始める前には一度場所を設けるか、小津中でそういうプロジェクトをいかがでしょうか。

[高橋委員]いくらでも。

[嶋田委員] ありがとうございます。そういう意味では、量的な調査と質的な調査というものがミックスされて、フィードバックされるのはとても素晴らしいと思います。ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。高島委員お願いします。

[高島委員] ありがとうございます。泉大津の子供の読書環境や図書館についての考えを知る上で、とても面白い興味深いアンケートだと思いました。アンケートにもう一つ、キミドキって知っていますかという質問項目があれば、良かったかなと思います。もちろん名前を知ってもらうことが目的ではないとは思いますが、子供たちはキミドキという名前を知らなくても、図書館連携であったり、学校での図書活動であったり、プロジェクトの恩恵という経験を受けて、様々な経験していると思うのですが、このキミドキは長い時間をかけて子供たちの意見を聞きながら作られた計画なので、理念を知ってもらいたいと思いました。子供の読書環境は、地域や家庭での環境も大事だと思うので、理念を共有するには名前を積極的にアピールして、今後どれぐらい認知が広がっていくかというのを見てもいいのかなと思いました。

[嶋田委員]ありがとうございます。

[澤谷委員] 高島委員にお聞きしたいのですが、高島委員もキミドキの主体者になる側の人なので、計画が始まって感じられた変化とかまちライブラリーをされている中での変化はありましたか。

[高島委員]まちライブラリーの活動をしていて、子供の読書機会を増やしてほしいとか、本を通じていろんな経験をしてほしいと思って活動してきた身としては、図書館がこういう読書推進計画を掲げて、市として子供の読書環境を整えますよ、応援していきますよという姿勢を見せていただくことは、一市民としてすごく嬉しいことではあります。泉大津市が読書に力を入れているというのは、一つの誇り、市に対しての誇りにつながるのではないかと思います。

[澤谷委員]運営する上で市の後押しを感じられるようなものが具体的に出てきた、ご自身の活動のバックがきっちり見えたっていう風を感じられたのかなと思って嬉しいです。

[嶋田委員]ありがとうございます。

[事務局]市民代表で来ていただいている高島委員に言っていただくと嬉しいです。今後は、9～10月の社会教育委員会議と教育委員会議にかけてという、前回と同じスケジュールです。もう1回くらいの協議会で整えたいと思っております。基本的には、前に作らせていただいた時のように、子供の読書活動推進に関する法律の理念に基づき、すべての子供があらゆる機会とあらゆる場所において、自主的に読書活動ができるよう環境整備を整うことに重きを置いた計画を策定するという、このところは、そのままにしたいと思っています。大人がきちんと整備するからね、安心してねっていうのは、やはり最初に掲げたいなと思っているところと、子供たちの読書環境を整えることに、あらゆる大人は本気で関わる場面を作っていくんだいうところをしっかりと書いていけたらいいなと思っています。お伺いしたいのは、前回と同じように、漫画何ページでわかりやすく伝えるっていうところは変えない、このスタイルは変えないというところでよろしいでしょうか。また、そこに取り組みと理念、この先こうなりますよというのを前回は書かせていただきましたけれども、今回はより具体的に、ここではこういうことをやるんだというのが、漫画では難しいのかもしれないですけども、子供たちも関わる大人もイメージできる絵が入れられたらいいのかなと考えていますが、そこに関してご意見をいただければと思います。

[嶋田委員]はい、いかがでしょうか。

[阿児委員]その形の前に考えないといけないのは、変える部分と変えない部分、変わらない部分っていうのがあると思います。やはり個人的に変えてほ

しくない部分というのは、実は前のマンガの部分というよりは、最後の策定にあたっての基本的な考え方を記すこと、目標とする姿を記すこと、やることと関わる人を記すことってというのは、やはりここは変えてはいけないところだと思います。これがちゃんと定まって提示されていることによって、漫画の部分とか、姿が描かれたと思いますので、中身はもちろん再考というのは必要だと思いますが、ここの軸は変えない方がいいのかなと思っています。もう一つ変えていくという時に、キミドキⅡというのが仮タイトルになっていますけれど、続きとして読むものなのか、それとも今回はまた読み切りの短編なのかというので異なってくると思います。まだ3年間という短い期間ですよ。今日の最初の報告でありましたけども、ビジネス支援もやっと5年で一つの形が見えてきたってことを考えますと、推進計画であっても3年間まずやって、さらに次の3年間、そうすると前の3年間がやっと形になって見えてくるっていうところも出てくると思うんです。そうすると、読む人とか、子供たちが、そのキミドキⅡだけを読むのか、やはりキミドキⅠから読んでいるからこそわかるのか、今それでどう取り組んでいこうと泉大津市はしているのかってわかるとか、そういうコンセプトを考えないと、なかなかⅡっていうのを作っていくのは難しいのかなと個人的には思っています。今日は委員の方々とどういうやり方があるのかというのを議論できればいいのかなと、まず私自身のどうしたらいいんだろうという悩みのところをお話しさせていただきました。

[嶋田委員]ありがとうございます。泉大津市の秘書広報課が公式 YouTube を持っています。例えば、小津中学校のプロジェクトの生徒さんがインタビューされるような形で、計画の中身を短い動画で伝えるというのも方法論的な話で恐縮なんですけども、あってもいいかなと思いました。先ほど阿児委員からのご指摘で、私もそうだなと思ったのですが、本当に今計画更新とか短いスパンで測るということが行政、自治体にも要請されるわけですけども、どういうことができたかっていうのを返すバージョンみたいなことでもいいのかなということをお阿児委員の話聞いて思いました。

[岡本委員] ちなみに読書活動推進計画って、計画の年次って、法的に決まっていますか。決まっていないですよ。そこは課題かなと思うのですが、3年はやはり短いかなと思います。教育関係で言うと、いわゆる教育課程、カリキュラムの改訂ぐらいの長さに合わせた方がまだいいのではないかという気がするんですよ。カリキュラム改訂は比較的その時代を象徴するという

か、かつてであればゆとり世代みたいな表現がありましたけれど、それぐらいじゃないと後々評価が難しいという気がしています。今回は最初だったので、これぐらい3年で1回総点検できるというのは悪くないと思うんですけど、ちょっと長さをフレキシブルにした方がいいかなという気がします。ただ一方で、今カリキュラム改訂なんかで少し問題になっている点としては、AIがこれだけ一気に進展してきている中で、カリキュラム改訂ちょっと悠長すぎないかっていうのは議論のあるところであり、そうすると、不易流行的な取り組みが必要で、根幹の部分はそう簡単に変えてはいけないし、そう簡単に変えなきゃいけないような計画を作らないことが必要なのと、ただ比較的早いサイクルで見直しをかけられるように、検証できるようにしていくというのも必要で、その方法論は少し要検討かなと思っています。今、ぜひ提案として申し上げたいのは、私はここのところ自治体に何かの政策提案をするときに、アジャイル方式というのを徹底して提案していて、これは国家的にも行政のマネジメントの手法として導入されつつありますけれど、もともとはWebのシステム開発で用いられてきたやり方です。とにかく短期のサイクルで検証して見直しをして、さらにバージョンアップしていくようなやり方のことをアジャイル、敏捷とか素早くっていうニュアンスですが、長期間の計画に対して、部分的な対応措置についてはアジャイル的な進め方をするといった次期計画であると良いのかなと思っています。今まで読書推進系の計画で見たことがないので、ぜひやっていただくと良いかなと思っています。子供たちの読書環境もどんどん変わっていきますし、それに合わせた随時な対応をしつつ、しかし、根本的に読むっていうほどの価値がそんなにガラッと激変したりするわけではないので、表面的なそのインターフェースの部分の変化に対しては、即応できるような次期計画の作られ方というのは望ましいのかなと考えました。

[嶋田委員]ありがとうございました。

[澤谷委員]先ほど岡本委員がおっしゃったことと重なりますが、当館は計画を作る時にわりと遠い未来の姿を見据えて、5年の間にこれをしましうってというようなやり方ですから、さっきおっしゃったアジャイル方式のような形で計画を立てたりとかっていうようなことをしています。子供の読書って、ツールが変わっても目指す姿はそんなに変わらないと思うので、それでもいいのかな。その代わりに、いろんなものが見えてきたら、それによって変

化していったり、計画自体を見直すってことも場合によってはあるというやり方でもいいのかもしれないですね。

[事務局]国が5年で、その翌年、都道府県が5年で作ってというような流れが多いです。泉大津市の中でいうと、生涯学習推進計画がありますので、ここで切るかというのを考える必要があると思います。

[嶋田委員]そうですね。ありがとうございます。この取り組み自体は、子供読書活動推進計画ということでいうと、もちろん図書館だけの枠組みではなく、教育委員会の枠組みだと思いますが、教育委員会会議とか、社会教育委員会会議とかで、どんなご意見があったかを館長の視点から教えていただけますでしょうか。

[事務局]この件を社会教育委員会議にかけさせていただいたときは肯定的なご意見をいただいております。教育委員会議には私は入れませんので、課長から聞くだけですけれども、議会ではこれをお出ししたときに、かなりいいねというご意見をいただきました。視察にお見えになる自治体の方は、こういう方法があったのかととても驚かれます。

[嶋田委員]ありがとうございました。他にいかがでしょうか。

[谷合委員]視察の話がでましたが、今年の2月に福岡県の大牟田市へ講演に行きました。テーマは漫画と図書館で個人的にはすごく勉強になりました。シープラの漫画コーナーも一生懸命見させてもらって、子供たちがどんなふうに読んでいるかとかもしっかり観察させてもらったんですが、その大牟田での公共図書館の職員研修で、このキミドキの紹介をしたら、皆さんがものすごい食いついてきて、九州にあまねく轟き渡ったと思うので、そろそろ視察の申し入れがあると思います。今改めて見ている、どこか変えるところがあるのかなと思うんです。先ほど阿児委員がすごく大事なことをおっしゃっていて、これが1だとしたら2を作るのか、変えるとしたら改訂版ですので、単行本として改訂版が出るのか、シリーズものとして第1巻、第2巻で出るのか、そこに大きな違いがあると思います。変えて欲しくないところと、変えていいのではないかとこのところがあると阿児委員がおっしゃっていましたが、私もそういう目であるほどと思って今改めて見直して、変えるところはないと思います。その辺をこれからどう考えるのか。あえてここはなくてもいいじゃないかっていうところがあれば、そこをどう差し替えるかって話なのかなと思いますが、さっきから出ているように、大きな目標、長

いスペインでの戦略戦術、あるいはミッションとそこに向けてのいろんな工夫を捉え直してもいいのではないかと思います。理念の部分、読むってどういうことというところから入る部分というのは多分変わらないと思いました。

[嶋田委員]ありがとうございます。ただいまのご意見に対して館長いかがでしょうか。

[事務局]ありがとうございます。変えなくていいよねっていうお話はすごくありがたいです。そのものを変えないにしても、取り組みはどんどん変わっていくので、まだまとまってはいませんが、QRコードで飛んだところにあるホームページの「どこが何をやります」というところが変わってくるのかなと思っています。

[嶋田委員]ありがとうございます。

[岡本委員]変える前にぜひ、この表現がどれくらい子供たちに刺さったかをぜひ知りたいです。子供たちの負担をあまり増やしてもいけないんですけど、どう刺さったかをぜひ知りたいですね。あるいは刺さっていないのか。図書館はこんなものというイメージが語られる部分のセリフを子供たちに入れてほしいですね。今だったら、そのセリフを書き換えていいですよと問いかける。どうやって書き換える、何か他にもっといいものがあるというのをぜひ聞いてみたいと思っています。そこのセリフをはめ込んでいくようなワークショップをやれたら非常に面白いなと思いました。

[嶋田委員]ありがとうございます。続きということと言うと、最後の絵ですよ。子供たちが実際行ってみて、どうだったかというような意味での続編的なものを見てみたいです。それもぜひ子供たちのご協力がないとできない部分だと思うんです。それはアンケートから拾うってこともあるでしょうし、インタビューとかワークショップとかあると思うんですけど、時期は別として、次に見たい、読みたいと思いました。いろいろご意見がありましたけれども、館長から質問があればお願いします。

[事務局]セリフを子供に埋めてもらうというのはすごくいいし、自分たちが携わったっていう感じがとても大きくなるので、ぜひやりたいと思いました。今回のアンケートの中にも、「『キミと、よみドキ』ってなんだよ、そんなの知らないよ」ということを書いてくれた子供もいらっしまったので、自分じゃないにしても、お友達がこのセリフ書いたんだよねというのだけで

もすごく身近な計画になっていくと思います。第2弾ではなくて、なんと表現したらいいんでしょうか。バージョン2みたいな感じでしょうか。

[谷合委員] 増補版。でもそうすると毎年長くなっていくので難しいですね。

[事務局] 子供たちの意見が2千数百件あって、なかなかここで、皆さんどうでしょうとお測りするだけの、まとまりができなかったのも、すみません、ご負担でなければ、私の方で子供たちの意見を集約して、あとは学校司書からいただいたものも集約して、皆様にお送りしてもよろしいでしょうか。そこからまた見えるご意見を委員の皆様から頂戴できればありがたいです。

[岡本委員] これだけのデータなので、もう少し活かせるといいかなと思っています。例えば、桃山学院大学の水沼先生などに研究として取り組んでいただいて、もう少しテクニカルなことで、このベクトルとかをもっと交えて分析をしたら、かなり面白いんじゃないかと思います。なかなか、これだけの量の子供のかつこの地域の意見っていうデータはないので、できればそこまでやった方が面白いかなと思います。それは政策的にも、まさにEBPMっていうことになりますよね。きちんとデータを取って、それに基づいて政策判断をしていくっていうことを、取り組みとして、大人の背中として示してあげると、それ自体を面白いって思う、センスのいい子って必ずいると思うので、ぜひそれはご検討いただければありがたいです。

[澤谷委員] 高橋委員のところの中学生と一緒に研究のようなことができたから、子供たちが「おおー！」ってなるのかなと思います。

[岡本委員] 大いにありえますよね。

[高橋委員] 何でもすると思います。メディアセンター(図書室)が好きな子供は多いです。学校司書とよく放課後に一緒に活動したり、しゃべったりしていますので、その子供たちはこういう研究なんかすごく喜んでやるかなと思います。ただ、他の学校もあるので、声かけてやっていければと思います。

[阿児委員] やはりデータの共有先としては、関わる各課ですよね、生涯学習課とか指導課とか挙げられていたと思いますけれども、その方々に子供たちのアンケートの声っていうのが届く機会がなかなかないような気がするんですよね。やはりそこは共有していただくと、新たな視点、各課の担当の方々も見えてくるのではないかなと思います。各課としても、どうやって一緒に取り組んでいきたいと思いますっていうアイデアを計画ができてから

考えるじゃなくて、今の段階から考えていただけるようなきっかけ作りにもなるかなと思いますので、ぜひ共有できる範囲で共有いただくのがいいと思います。

[事務局]阿児委員に言われて思い出したのですが、教育委員会の枠を超えた課が子供の読書活動推進計画に関わっているのは全国的に見てもなかなかない先進事例でした。視点が違うと思いますので、週明け課長に依頼して関わっていただいている課に、この結果をどう読みますか、教えてくださいとデータをお送りしたいと思います。

[嶋田委員]ありがとうございます。閉会予定の時間まで、あとわずかになってまいりましたが、この案件で他にございますか。年次報告書について言及し忘れていたというようなことがあれば、立ち戻ってということでも結構ですし、何かご意見ご質問と運営全般についてですね、協議会の委員の皆さんの立場で、もしありましたらご発言お願いいたします。

[阿児委員]次回以降の協議会の話になるかもしれないですけども、最初に言っていた5周年というのが、いろんな区切りなんですよ。読書推進計画もそうですし、カードの更新もそうですし、あと3ヶ月ですよ。いろんなことをやろうかなと思っても、仕込んでおかないといけない時期だと思いますが、何か今、5周年というところを機に、何か考えているとか、取り組みをもう一度見直そうとかいうものがあれば聞いておければなというのが、個人的興味もあってお伺いします。

[事務局]実は5周年の前にシステム更新を控えており、それで手いっぱいではありますが、じわじわ人気が出てきている図書印帖の5周年バージョンを作る企画はスタッフからの提案で実行確定しております。3周年、4周年の時も特別スタンプにしたら、欲しいという方が多く、いろいろな地域から来て図書印を押してくださいっていう方もいらっしゃいました。お金をかけずに消しゴムはんこで作ります。最近、参加館に天草、平戸も増えました。システム更新に合わせて、ホームページもリニューアルするので、図書印帖のページに参加館が増えても大丈夫な作りに変えます。また、4周年の時に名前を募集したうーるらが意外に人気で、インスタでも毎日うーら通信とかいろいろやっています。去年の図書館総合展には布の絵本にしましたが、立体化はしていませんでした。今、スタッフが羊毛フェルトで一生懸命作っています。もう一つご報告ですが、今、皆様の目の前に置かせていただいている

このグリーン。視察のたびに、いろんな自治体の方が興味を持っていただいていたのですが、松本市立図書館に行きましたら、視察報告を受けたスタッフの方が、多肉植物を自分で小さい鉢に育てて、入り口のところで館内貸し出しを始めていらっしゃいました。小さいことですが、シープラを見ていただいて、自館で活かしていただいたというのは、すごく嬉しく思っております。

[岡本委員] 5年経つということにも関わりますが、やはり既存施設のリニューアル、リノベーションによって図書館を整備したということが、改めて注目されていていいかなと思います。再来週、尼崎市立図書館からの視察をお願いしていますが、最近、既存の図書館をそのまま図書館にリノベーションするとか、あるいは別用途の施設をコンバージョンするという取り組みが圧倒的に増えてきています。おそらく、これだけ物価が上がると、新館整備ができる自治体もかなり限られてくると思うんですね。そうなった時に、こういう取り組み、必ずしもそれが常にベストアンサーであるとは限らないんですが、5年前にやったということには結構先見の明があるなと思っていて、そういう政策的な価値っていうのももう少し評価されていいし、どう評価するかというのはいろいろ論点あると思うんですけど、きちんと一度整理されてもいいのかなと思います。実際私も仕事柄いろいろ、こういうリニューアル例を調べているんですが、おそらくここと真庭市立中央図書館がこの近年では先行している2つの例ではないかなと思ひまして、ちょっと触れさせていただきました。

[嶋田委員] ありがとうございます。私の方から一点、年次報告書の最後のページに決算の予算があるんですけども、もう少し市民にとっての具体的な数値が部分的にあってもいいのではないのでしょうか。一般会計に対して図書館費がどれぐらいの比率についても評価指標に入れてはどうかと思ひました。ほかに皆さんからなければ、事務局にお返ししたいと思います。

[事務局]議長、ありがとうございました。たくさんのご意見をいただきましたので、またしっかりと活かしてまいりたいと思ひます。以上をもちまして、令和8年度第1回泉大津市立図書館協議会を終了いたします。委員の皆様、本当にありがとうございました。